



女の千年王国 / Millennial Women (1978) /
ヴァージニア・キッド編
(小池美佐子訳) / サンリオ
オ(文庫・1/5刊・¥480)

“誤解”はどこにでもある。この訳者後書きなど好例だろう。まるで、本書がフェミニズムSFの教本であるかのような書き方をしてる。もちろん、フェミニズムを、自己の作品に鮮明に打ち出し、創作する作家はいる。これは事実である。ジョアンナ・ラスの作品群や、アンソロジーならば、サージェントのものがよく知られている。しかし、本書はそういう目的の下に編まれてはいないのだ。ブームを呼んだ女流作家を集め、アンソロジーを組んだという、(悪く言えば)それだけでしかない。身構えて読むと、肩透かしを食う。もっとも、だからといって、中身が薄いとも言いきれないだろう。約半分のポリウムを占める、ル・グインの中編が収穫である。植民惑星ヴィクトリアには、都市であるシティーと、農村であるシャンティイーがあった。しかし、時を経て、地球の歴史が示すとおりの、対立と力による支配が始まろうとする。これは、都市の少女ラズの、遍歴の物語でもある。

ル・グインとしては、小品に属する物語だが、アオサギに託されたラズの思いに、作者特有の思想と詩情が読み取れるのだ。(俊)